

# 日中戦争期における『三国志演義』再話の特色

箱崎 緑

## 一．はじめに

日本で江戸時代から大衆的な人気を博している『三国志演義』<sup>1</sup>は、現在では、小説に止まらず多くのメディアを通してその世界に触れることができる。第二次世界大戦後、『三国志』ブームは何度か訪れ、平成に入り定着したとされており<sup>2</sup>、ブームを形成する作品の多くが、元を質せば吉川英治の『三国志』<sup>3</sup>に行き当たる。例えば、柴田鍊三郎<sup>4</sup>は一九五五年に吉川版を再話した際、『三国志』とはこんなに面白いものか、とおわかりになったら、あらためて「吉川三国志」をお読みになるといい。<sup>5</sup>と『三国志演義』ではなく吉川版を讀者に薦めている。このことから、既に一九五〇年代には、吉川版が『三国志演義』再話の決定版になっていたことが窺える。<sup>7</sup>

このように、吉川版は、日本における『三国志演義』の受容において重要な作品だが、戦前における唯一の再話ではな

く、日中戦争という時代の中で、他の再話作品と相前後しながら生まれた作品であった。吉川版連載前後、一九三九年から一九四一年の僅か三年程の間に、残されているだけで六種類もの『三国志演義』の再話が新しく出版されていたのである。従来、『三国志演義』の受容においては、吉川版の重要性のみが論じられてきたが、本論文では、吉川版も含む、この『三国志』ブームとも言える日中戦争期の三年間が、日本における『三国志演義』受容にとって重要な画期をなしていることを示したい。江戸時代に成立した『通俗三国志』の完成度の高さ故に停滞していた『三国志演義』の大人向け再話は、日中戦争期の中国に対する関心の高まりを契機に多数登場し、戦後受容の基礎を成したのである。更に、先行研究は、吉川版の合理化や曹操像の刷新を評価してきたが、それらの傾向は日中戦争期の他の再話にも共通していることを示し、吉川版以外の作品への再検討の一步としたい。

## 二・日中戦争期における『三國志演義』の再話について

### a. 出版状況

『三國志演義』関連小説として、明治期は一般的に江戸時代に成立した『通俗三國志』やその簡略版が老若問わず読まれていたが、二十世紀に入り多様化し、『三國志演義』の注釈や翻訳、子ども向けの再話といった『通俗三國志』とは異なるタイプの著作が出現した。そして日中戦争が始まると、注釈、翻訳、子ども向け再話のいずれにも当てはまらない、大人向けの再話が多数登場する。一九三九年の岡本成蹊『三國志』を筆頭に、吉川版、村上知行『三國志物語』、一九四〇年の雄山閣編『三國志』<sup>11</sup>、一九四一年の弓館芳夫『三國志』と、僅か三年の間に五作品が陸続した。<sup>13</sup>

それまで『通俗三國志』の抄訳や、毛宗崗本の翻訳・注釈などは出版されていたが、大人向けの口語再話は確認できていない。『通俗三國志』の再版は続いていたが、再話に限って言えば、『西遊記』や『水滸傳』の方が活発に行われていた。<sup>14</sup>しかし、日中戦争期の読者にとって、それまで読まれてきた『通俗三國志』は、読み辛いものとなっていたため、新しく口語再話が出現したものと考えられる。<sup>15</sup>大人向け口語再話の登場は、『通俗三國志』から離れた読みやすい形で『三國志演義』の魅力を見せ、戦後、『三國志演義』が人

気と呼ぶ大きな要因となった。

また、評釈、翻訳及び子ども向け再話は、漢学者と児童文学の書き手によって行われており、読者も『三國志演義』を漢学や児童文学として受容していたことが推察される。一方、日中戦争期に大人向けの再話を担った人々は、英語教師の岡本、大衆小説家である吉川、中国在任の村上、新聞記者出身の弓館など多様である。様々な背景や個性を持つ書き手たちが『三國志演義』の再話を行ったため、漢学や児童文学とは一線を画した個性豊かな再話が生まれた。

日中戦争期は、それまで読まれてきた『通俗三國志』から、多様な作者による口語再話へと、日本における『三國志演義』が大きく転換した時代であった。

### b. 「三國志」ブームの背景

日中戦争期の『三國志演義』の再話の多くは、中国への理解を促すという役割を強く意識している。

弓館は、第一書房の「戦時體制版」の中で『西遊記』『水滸傳』『三國志』と、代表的な中国古典小説の再話を担当した。『西遊記』の「はしがき」では、一九三二年の改造社版、一九三九年の「戦時體制版」双方で、同書の魅力を説いているに過ぎず、戦時体制や中国理解は強調されていない。<sup>16</sup>一九四〇年の『水滸傳』の「はしがき」では、元々のストーリー

の面白さなどに加え、「支那事變以來われ／＼の耳に或は目に馴染の深い土地の名が隨所に」出てくるため一層興味が増すとし、一九四一年の『三國志』では、「はしがき」に時局と著作を結び付ける姿勢が強く打ち出されるようになる。先ず、三國志の「幾多人物の間に行はれた物凄い闘争と、血の染むやうな権謀は、正に「支那の姿」その物」だと述べ、自らの興味は固より、現在の日支關係に鑑みて「支那といふ國を知る助け」にすべく訳述に臨んだとし、その点において第一書房と考えが一致すると言う。また、『水滸傳』同様、地名による興味の増大について述べるが、「支那事變勃發以來、忠勇なる皇軍が奮戦した地名」と書き、より踏み込んだ表現になっている。<sup>18</sup> こうした弓箭の著作における「はしがき」の変遷からは、時代が進むと同時に、同じ作者が同じ中国古典の再話を行っても、中国理解を訴える比重が高くなっていることが窺える。

他の再話でも、中国理解を促すために、『三國志演義』再話を勧める例が多く見られる。

村上版の広告文には、恐らく編集者の手で「劇的表出による支那の性格の極限・人間性の暴露と人生的叢智の啓示 老 大國三千年の歴史」その自然と經濟と政治の全環を母胎として生成した鬱然たる大樹。これこそ支那民族の傳統と文化の極致的表現である。」と謳われ、村上版の中に中国の傳統と

文化が語られているとし、「序」でも、中国人を知るのにてつとり早い方法はないとしつつも、固いものが厭なら、三國志演義と紅樓夢と水滸伝に眼を通せば良いと説き、「私が茲に『三國志演義』を臺本としての物語を書いたのも、日支の關係今日の如くなるに際して、斯かる方面からでも、同胞の中國人に就いての認識を深めたいと思つたからに外ならぬ。」と、時局を受け、中国人についての認識を深めるために本書を書いたとする。<sup>20</sup>

吉川版の連載前の予告「次の新聞小説」では、新聞社、吉川、挿絵を担当した矢野橋村の何れもが、中国理解の必要性を説き、「新東亜」建設時代に吉川版が書かれる意義を強調している。また、読者も中国に興味を持つていと考えているようで、吉川は「日本の総意の対象」という語を用い、中国理解の重要性は読者を含む日本全体の共通認識だとしている。<sup>21</sup>

野村版の「まへがき」でも、自著を通して中国を知るよう説いている。中国と日本の相違と、『三國志演義』に描かれた中国と「現代の支那」が似ていることを指摘し、『三國志演義』を通して中国理解を訴えている。中国の人々の考え方は日本とは違うということを具体的に説明しており、登場人物の行動と實際の対中状況を重ねるように読めなくもない。<sup>22</sup>

このように弓館版、村上版、吉川版、野村版の執筆には、中国の捉え方に差はあるものの、日中理解の一助にしたいという動機が共通して働いていたことが窺える。

また、小説以外でも、太田熊藏『諸葛孔明傳』では、諸葛亮が「支那隨一の偉人」とされ、中国を代表する存在だと考えられており、大東亜共栄圏を作り上げるために中国理解が求められる中、諸葛亮が必要視されている。<sup>23</sup>

このような『三国志演義』を用いて中国を理解しようとする態度は、一九一二年の久保天隨『新譯／演義三国志』や、一九二六年の最上哲夫『三國志物語』、一九二九年の早稲田大學出版部編『物語支那史大系』<sup>24</sup>などには見られないため、日中戦争以前は、同時代中国の理解と『三国志演義』は強固に結び付けられていないと言える。

日中戦争期に読者の間で中国への関心が高まり、出版がそれに応えようとする状況下で、『三国志演義』は、読みやすい大衆文芸として日本でも長く受容されてきたため読者の興味が見込めること、戦史であり実際の戦況と地名が重なっており、人物像も重ねられることなどから、多数の再話が出版されることとなったのだろう。

### 三．『三国志演義』再話本文の検討

#### a．先行研究の整理

様々な作者の手で『三国志演義』が再話されている現象は同時代にも認識されており、桑原は一九四二年に、長さや反復、定型の繰り返しという『通俗三國志』の長所が失われているとして、村上版、弓館版、吉川版を批判し、それらの特徴を現代化、常識化とまとめている。<sup>25</sup>

これに對して、先行研究の多くは、吉川版の独自性を評価している。本論では、その中から、合理化と人物像の刷新について扱う。吉川版の合理化については、現代の作家の眼から不必要な怪奇性を除いたことが指摘されている。<sup>26</sup>人物像の刷新については、中でも曹操についての言及が多く、吉川が同情的態度に立ち、人間的な魅力を描く中で、独自の曹操像に到達し、三国志の世界が勧善懲悪から立場の違う好漢たちの闘争のドラマになったと評価されている。<sup>27</sup>

このように、先行研究では、吉川の熱を込めた現代的な描き方によって『三国志演義』よりも曹操、そして物語全体の魅力が増したことを指摘しているが、同時代の『三国志演義』の再話の中で、吉川版だけが唯一、合理化を行い、曹操を魅力的に映そうとしている訳ではなく、他にも似た傾向を持つ再話がある。本稿では、先行研究が吉川版の特徴とする、合理化、人物像の刷新という二点を、他の再話と併せて検討する。従来、吉川版の特性と考えられてきた傾向は、同時代の他の再話にも共通しているのではないか。ただ、再話におい

ては底本を引き写す際の筆の走りという要素も大きく、方向性は同一作品においても一様ではないことに留意が必要である。

## b. 合理化

ここでは、日中戦争期の『三國志演義』の再話について、合理化という観点から検討する。

合理化について、『三國志演義』では関羽の祟りとされる呂蒙の死の場面を取り上げて検討する。関羽を捕えた呂蒙は、荊州を収めた慶賀の宴席で孫権を罵り、関羽だと名乗った上で絶命する。各本から、孫権から杯を差し出された呂蒙が、関羽の霊に取り憑かれ命を落とす場面を引く。

『通俗三國志』の底本、李卓吾本では次の通りである。

於是呂蒙接酒欲飲。忽然擲盃於地。一手揪住孫權。厲聲大罵曰。碧眼小兒。紫髯鼠輩。還識吾否衆將大驚。急救時。蒙推孫權大步前進坐於孫權位上。神眉倒豎雙眼圓睜而言曰。吾自破黃巾以來。縱橫天下三十年矣。被汝一旦以姦計圖之吾生不能啖汝之肉。死當以追呂賊之寃。吾乃漢壽亭侯關雲長也。權大驚。慌率大小將士皆下拜。只見呂蒙七竅鮮血迸流死於座下。衆將見之。且夕恐懼。

吉川版の底本とされる『通俗三國志』では、以下の通りである。

呂蒙盃をとつて飲んとしけるが、俄かに盃を地に投棄、手に孫権が胸を掴んで、大音聲をあげ、碧眼の小兒紫髯の鼠輩、かへつてわれをしれりやと、罵りければ、諸人がおどろいて立さわぐ所に、呂蒙つひに孫権をおしのけ、大いに歩んで上座にすゝみ、眼を怒らし眉をはり、われ黄巾の賊を破つてより、天下に縦横すること三十年、一旦汝がいつはりの計事に落され、われ生て汝が、肉を啖ことあたはず。死して必ず、呂賊が魂を追ん。我はずなはち、漢の壽亭侯關羽なりとよば、りければ、孫権おそれおどろき、諸將と共に地に拜す。ときに呂蒙は、七竅より血ほどばしりて立所に死ければ、見る人みな、身の毛よだちて恐れあへり。

このように、『三國志演義』『通俗三國志』では、関羽の霊が座にいた一同に認識され、呂蒙の身に起きた怪事のはつきりと描かれている。雄山閣版は、殆ど『通俗三國志』をなぞっており、弓館版は、大きく書き換えているものの、大筋は変わらず、合理化はなされない。

吉川版は、合理化として、宴席の場面の後に附言をつけて

いる。

すると呂蒙はやにはに杯を擲つて、孫權をはつたと呪めつけ、

「碧眼の小兒、紫髯の鼠賊、思い上るを止めよ」

と、大喝して、なほ何か罵り出した。

満座の人々は總立ちになつて、彼の周りに集まり、他へ連れて行かうとしたが、呂蒙は怖ろしい力で振り放ち、愕き騒ぐ人々を踏みつけて、遂に上座を奪つてしまった。そして物の怪に憑かれた眼を怒らして、

「われ、戦場を縦横すること三十年、一旦、汝らの詐りに落ちて命を失ふとも、かならず靈は蜀軍の上にあつて呉を亡さずには措かん。かくいふ我はすなはち漢の壽亭候關羽である」

と、吠ゆるが如く云つた。

孫權も諸人もみな震へあがつてほかの閣へ逃げてしまつた。だが燈は消えて眞つ暗になつたそこから呂蒙は出て來なかつた。後、諸人がそつと灯を燈してそこへ行つてみると、呂蒙は自分の髪の毛をつかんで、悶え死んでゐた。

これも當時流布された巷の話の一つである。もとより真相に遠いことは云ふ迄もなからう。けれど荊州占領の

後、幾ばくもなくして呂蒙が病で世を去つただけは事實であつた。<sup>30</sup>

吉川版は『三国志演義』に沿つて呂蒙の最期を描いた後、巷間の噂だと附言し、合理化を図っている。加えて、呂蒙の最後の描写も底本である『通俗三国志』とは異なり、孫權をはじめ列席の人々は他の閣に逃げ、後から見ると呂蒙が死んでいたとする。燈が消え暗くなった宴席に取り残される呂蒙と、時間が経つてから灯を燈して呂蒙の様子を見に行く諸人の様子は、怪談のような静謐な不気味さを湛えている。その場で血を吹いて死ぬ方が衝撃が強く臨場感があるが、後から確認する方がストーリー性及びリアリティがあり、吉川の叙述の巧みさと言えよう。

野村版は子ども向けだが、吉川版同様、合理化が見られる。

呂蒙は孫權から差された盃を受けて飲まうとしたが、俄かに地になげうつてすつくと立ち上がつて、

『あを目の小童、紫髯の鼠（いづれも孫權の悪口）め、われを見知つてゐるか！』

と大音聲に呼ばはり、つかく、と孫權を押退けて上座にすゝんだ。これとは驚き騒ぐ一座を見下し、眼を怒らせ眉を張つて、

『黄巾の賊を破つてよりこのかた天下を縦横すること三十餘年、生きて汝が肉をくらへなかつた代りに呂蒙（呂蒙）が魂を追出してくれる。われは即ち漢の壽亭侯關羽（關羽）だ！』

といふかと思つてと忽ち眼鼻口から血を吹きだして、ぱつたり倒れて死んでしまつた。關羽の魂が呂蒙も取殺したのだといふが、科學的といへば頗る怪しい。多分一種の恐怖病にかゝつて狂死したのだらう。<sup>31</sup>

野村版の解釈は、巷間の噂と断ずる吉川版とは異なり、呂蒙の死の場面をある程度認めつつ、呪いではなく一種の狂死だと結論付けている。物語に添いつつ現代的な解釈を示す姿勢は多分に教師的である。また、『三国志演義』の言葉を残しつつ括弧内に解説を入れていることから、子どもを讀者にしつつも、より原文らしいものを提供しようとする姿勢が窺えよう。<sup>32</sup>

村上版は、底本である『三国志演義』毛宗崗本をなぞつており、呂蒙の死の非科學的な性格について、吉川版、野村版のような明確な合理化はなされない。しかし、「氣が觸れた呂蒙は孫權をつき倒し、のつし／＼と大腿に歩いて」と、不可解な行動を取る呂蒙に対し「氣が觸れた」という形容を添えている。この表現は、『三国志演義』の訳業という範囲の

中で事態を合理化しようとしたものとみることが出来る。村上の著作の全般的な特徴として、物語の中に自らの言葉を長く挟まず、『三国志演義』の訳本を提示しようという姿勢が挙げられる。<sup>34</sup> 村上は『三国志演義』を訳述する際に、合理化が際立たないよう注意を払つていようように見える。それでも「氣が觸れた」と一言断つたところが村上の配慮であり、『三国志演義』との違いである。

これまで見てきた再話が、大筋では呂蒙の死を『三国志演義』に沿つた形で描く中、岡本版は宴席の場面を大幅に削り、逆に孫權の心理を書き足している。

「これで俺の希望もやつと達しられた」

今度の戦ひに功勞のあつた大將連を集め、盛んな祝宴を開き、孫權は席上さう云つて頗る滿悅の態だつた。

だが、歡喜と悲哀とは紙一重——といふ言葉がある。希望が叶つて有頂天になつた途端に、何だか物足りない寂しさが、犇々と押し寄せて來る。

今孫權が丁度さうだつた。

漠然とした空虚な氣持は、次第に影が濃くなつて、たうとう不安になつて來た。

戦ひが終つて間もなく、第一の殊勲者である呂蒙が死んだ。關羽の亡靈に取り憑かれて、目、耳、鼻、口から

血を噴き出し、悶え死に死んだといふことだ。

それを聞くと、孫權の不安は更らに大きくなつて行つた。<sup>35</sup>

ここでは、孫權の心理を描く紙幅で『三国志演義』通りの場面を描くことも可能である。敢えて呂蒙の死は簡単に済ませられ、逆に人間心理一般及び孫權の心理に焦点が当てられている。『三国志演義』や他の再話では呂蒙の死の怪しさがこの場面の眼目となつているのに対し、岡本版は孫權の心理を中心に据え、不安を細やかに描いている。岡本版は呂蒙の死に合理的な説明を与えている訳ではないが、『三国志演義』の描き方と比べ、心理描写を加えたことで、近代的色彩が増していると言えよう。呂蒙の死を関羽の亡霊によるものとしながら、宴席での呂蒙の最期を描かなかつたのも、宴席の場での孫權の歡喜を強調して描くためかもしれない。

このように、日中戦争期の『三国志演義』の再話は、底本をなぞりながらも表現を工夫しており、合理化を志向する再話も多い。同じように合理化を志向していても、合理的解釈に加え筋も変更しリアリティを強調する吉川版、原文を語つた上で解釈をつけて合理化する野村版、さり気無く単語で合理的解釈を滲ませる村上版と、その方法は一樣ではない。更には、主題をずらし近代的色彩を添える岡本版の例もあり、

色々な表現が模索されていたことが窺える。

### c. 人物像の刷新

『三国志演義』における曹操像について、魯迅は、人物の特徴を強調する余り、作者の意図とは異なり、曹操が豪爽で知的な人物として描かれていると言ひ、<sup>36</sup>一方で、劉備については、偽善とも取れる態度を批判している。<sup>37</sup>『三国志演義』では、善の劉備と悪の曹操という構図の中で、はっきりとは示されない曹操への肯定的評価と劉備への否定的評価は、日中戦争期の『三国志演義』の再話において明示されているものもある。従来、先行研究が指摘してきた吉川版同様、弓箭版、岡本版も、『三国志演義』のような図式で登場人物を判断するのではなく、行動から評価する姿勢をはつきりと示している。

まず曹操についてだが、弓箭版は、『三国志演義』同様、曹操の性格を否定的に見る場合や行動を揶揄する場合も多く、<sup>38</sup>計算して行動する人物というイメージも繰り返される。<sup>40</sup>

その一方で、感情を露わにする場面を描き、曹操を人間的に描いている。<sup>41</sup>さらに、曹操を肯定的に捉える場面も多く、判断力や不屈さなど、語り手の価値観から見て評価できるところには、惜しげもない賞賛が送られている。<sup>42</sup>死に臨んでの妾たちや墓についての指示に対し「……」何処迄も曹操らし



いぢやありませんか。<sup>43</sup>」と読者に呼び掛けている箇所は、これまで語ってきた曹操への親近感に溢れ、『三国志演義』や『通俗三國志』の、悪辣非道な曹操像から脱していると言えよう。

岡本版は、曹操を否定的に見ることは殆どなく、肯定的に捉えている。登場して間もない段階で、董卓暗殺に失敗した曹操を「だが、流石は曹操、少しも慌てた様子を見せず、悠々と櫓を持ち直し〔…〕<sup>44</sup>」と描き、暗殺に失敗したことを悟りつつも取り乱さなかったことを評価しているようだ。弓館版同様、不屈さも強調し、<sup>45</sup>また、許都にいた関羽が劉備との再会のため曹操の下を辞す場面では「曹操も正に天下の大人物。英雄は英雄を知るといふのか、今は己れに背いて去り行く關羽の心中、曹操なればこそ解き得るのだ。情に於ては、可愛さ餘つて憎さ百倍ともなるべき所であるが、そこは流石に曹操の偉大な所であらう。」<sup>46</sup>と手放しで褒めているようだ。

一方、『三國志演義』で善玉とされる劉備は、弓館版でも岡本版でも、あまり肯定的に描かれていない。

弓館版は、劉備を揶揄する色が濃く、<sup>47</sup>言動を批判するかのよな部分も多い。<sup>48</sup>「傍に聞いてゐる劉備が、一刻も孔明を手離せぬなどと、持たせ振りを見せた後で、結局は承諾を與へ〔…〕<sup>49</sup>」など、劉備の行動を計算や裏のあるものとして捉

えている。<sup>50</sup>岡本版は、初め、劉備の行動を不思議なものとして眺めるが、<sup>51</sup>劉備に対して冷たい表現も散見され、<sup>52</sup>最終的には偽善者と断じる。

然し、今まで同じ一族の者の國をとることは出来ないなど、妙に片意地を張つてゐた玄德もこれ（引用者注・龐統の「他人の國を取つ」として、楽しいつてのは、仕う云ふのですかね。普段のお言葉と違やしませんか」との発言を受け、益州を奪うことが出来る喜びを指すか）が本音だつたのだらう。痛い所を突かれて、グツと來たのだ。してみると、玄德といふ人物は、餘程世間體を重んずる見榮坊だつたらしい。謂はゞ一種の偽善者とも云へよう。<sup>53</sup>

弓館版、岡本版双方で、曹操、劉備の評価が『三國志演義』と異なる箇所は、底本から離れた独自の表現部分であり、口語の色彩が強い。自由な再話表現の中で、悪役というだけではない曹操の魅力がよりはつきり映じ、善玉というイメージにそぐわない劉備の行動には、非難が寄せられたようだ。曹操は、『三國志演義』が繰り返し説く漢朝の篡奪者という見方に捉われなければ、残忍さはあっても英雄として称揚すべ

き人物にもなる。一方、劉備の言動は、『三国志演義』の中でも、益州の劉璋に対して顕著なように、理念的な発言と実際の行動が矛盾する場面が多々見られるため、再話の際に再話者もその点を指摘したものだろう。底本の文章をなぞらない大人向け再話というジャンルが、曹操に対する評価を高くし、劉備への疑問を表出させたと見ることもできる。

#### 四．まとめ

日中戦争期に出版された『三国志演義』の再話本文を検討し、合理化、人物像の刷新といった傾向は、多くの再話に共通して見られることが分かった。日本における『三国志演義』の合理化と人物像の刷新は、従来、吉川版の功績とされてきたが、実際には、吉川版に限らず、日中戦争期に出版された再話作品全体に見られる変化であった。吉川版だけが『三国志演義』の現代化の先駆者ではなく、日中戦争期に『通俗三国志』から離れた独自の文章による再話が多数出現したことで、日本における『三国志演義』に変化が齎されたのである。これまで検討されてきた吉川版だけではなく、日中戦争期の『三国志演義』の再話全体が見直されるべきであろう。各再話をどのような読者が楽しんでいったのか、また、日中戦争期に大きな転換を迎えた日本における『三国志演義』の再話が、戦後、どのように展開していくのかについては、今

後の課題である。

#### 注

1 本論文では、『三国志演義』全般を指し『三国志演義』と表記する。版本の違いは必要に応じ附言し、各版本の呼称及び引用は、周文業『三国志演義版本比較プログラム』に拠る。『通俗三国志』は、博文館編輯局編『通俗三国志』第一一六卷（博文館文庫一五三一―一五八、博文館、一九四〇年）に拠り、引用も同書から行った。必要に応じ、他のものも参照した。

引用文中の傍点、括弧、太字は、原文による。引用者による括弧書きは注記した。ルビは原則として省略し、特殊な読み方を当てている場合は残した。

また、原文と対照できるものを翻訳、その他の省略や意訳を含むものを再話と呼ぶ。

2 雑喉潤『三国志と日本人』（講談社、二〇〇二年）、三頁。

3 吉川英治『三国志』（『中外商業新報』一九三九年八月二六日夕刊―一九四二年十月三十日夕刊）、及び吉川英治『新編三国志』『日本産業経済新聞』一九四二年十一月三日夕刊―一九四三年九月五日夕刊。連載半ばでの『中外商業新報』の合併により、タイトルが変わっているが、単行本では『三国志』という題名でまとめられているため、本論もそれに倣う。吉川版と略記する。

4 『吉川『三国志』』などは私の人間観、歴史観に影響を与えなかったはずなのに、これも原作では読んでいない。映像化さ

れ、漫画化されたものを見ることで、何か「よろしいのでは」ということですましてこれた(鷲田小彌太『時代小説に学ぶ人間学―寝食を忘れさせるブックガイド』(彩流社、二〇〇七年)、一六一頁)。「ここでは、映像や漫画の底本が吉川版だと認識されている。

5 柴田鍊三郎『柴鍊三國志英雄ここにあり』上下〔柴田鍊三郎選集十一、集英社、一九八九年〕所収〔初出〕『週刊現代』一九六八年一月一日号―一九七〇年十二月二六日号、柴田鍊三郎『柴鍊三國志英雄生きるべきか死すべきか』上下〔柴田鍊三郎選集十二、集英社、一九八九年〕所収〔初出〕『週刊小説』一九七四年五月十七日号―一九七六年九月六日号〕など、自らも『三國志演義』の再話を行っている。

6 柴田鍊三郎『三國志』(世界の国民文学①、鱗書房、一九五五年)、二四七頁。

7 一九八〇年代には、『三國志』についてインタビューを受けた六人中五人が、吉川版を読んだという(一部課長にきく、わが『三國志』体験)〔wii〕六月特別号(中央公論社、一九八五年六月)、五六一―五九頁)。

戦後に『三國志演義』の再話を行った作家たちも、吉川版を意識している。「〔…〕昭和の私たちが三國志といえば、吉川英治の『三國志』以外には考えられない(陳舜臣『諸葛孔明』で吉川三國志の宿題を提出)〔吉川英治記念館編『吉川英治歴史小説の世界―壮大なるロマンの魅力』(吉川英治記念館、一九九二年)、六五頁)。「ぼくの『三國志』との出合いは高校時代だった。吉川英治の『三國志』を読み、これが非常におもしろかつ

たのだ(北方謙三『三國志の英傑たち』(角川春樹事務所、二〇〇六年)、一三三頁)。」など。

8 『三國志演義』の注釈に、井上新一郎編『支那小説評解』第一一號(東海義塾、一九〇〇年三月五日)、抄訳に、久保天隨『三國志演義』(支那文學評釈叢書第一卷、隆文館、一九〇六年)、翻訳に、久保天隨『新譯/演義三國志』上下(新譯漢文叢書第十二十三編、至誠堂、一九二二年)、子ども向け再話に、最上哲夫『三國志物語』(世界名篇物語叢書六、金蘭社、一九二六年)などがある。

9 岡本成蹊『新譯三國志』(八絃社、一九三九年七月、十版、一九四一年七月)。岡本版と略記する。

10 村上知行『三國志物語』第一卷―第三卷(中央公論社、一九三九年十一月、十二月、一九四〇年二月)。村上版と略記する。

11 雄山閣編『三國志』(物語近世文學第十五卷、雄山閣、一九四〇年八月)。雄山閣版と略記する。

12 弓館芳夫『三國志』(第一書房、一九四一年一月)。弓館版と略記する。

13 野村愛正『三國志物語』(大日本雄辯會講談社、一九四〇年、四版、一九四一年)は、子ども向け再話である。野村版と略記する。

また、多数の『三國志演義』の再話にとどまらず、大場彌平『秋風五丈原』(中央公論社、一九三九年)、田中久『兵法三國志』(新正堂、一九四二年)など、史書『三國志』を語り直したのも出ており、日中戦争期における『三國志』熱の高まりが窺える。

- 14 奥野信太郎「三國志演義を中心として」、『中央公論』一九三九年九月特大號（中央公論社、一九三九年）、四五八―四六五頁、四五九頁。「水滸伝」の再話については、高島俊男「水滸伝と日本人」（大修館書店、一九九一年）に詳しい。
- 15 『通俗三國志』は、一九四〇年にも再版されている（博文館編輯局編『通俗三國志』第一―六卷）。
- 16 弓館小鱈『西遊記』（世界大衆文學全集六七卷、改造社、一九三一年）、頁数なし、弓館芳夫『西遊記』（第一書房、一九三九年）、頁数なし。また、一九四九年に再刊された『西遊記』の「はしがき」もほぼ同じ内容になっている（弓館小鱈『西遊記』上（第二書房、一九四九年）、一―三頁）。
- 17 弓館芳夫『水滸伝』（第一書房、一九四〇年）、一―四頁。
- 18 弓館版、三四頁。
- 19 村上版、二卷、頁数なし。第三卷にも同様の広告が掲げられている。
- 20 村上版、一卷、一―三頁。
- 21 「次の夕刊小説」、『中外商業新報』一九三九年八月二十四日夕刊。
- 22 野村版、四―五頁。
- 23 太田熊藏「諸葛孔明傳」（山水社、一九四二年）、十三頁。「序」では、「元々非常時に何か遣りたいと思ひ執筆に取り掛かっていたが、宣戦の大詔によって一氣呵成に筆を進めたと、時勢を受けた執筆であることを示している。序篇では、これまでの日本人がどのように諸葛亮を捉えてきたかを整理し、「眞に我國の先祖としか感じられない」と述べている（同一二、十頁）。
- 24 早稲田大學出版部編『物語支那史大系』第四―五卷（早稲田大學出版部、一九二九年）は、『通俗三國志』を収めている。早稲田大學出版部編『通俗二十一史』第四―五卷（早稲田大學出版部、一九二一年）の改版であるが、例言は書き改められている。
- 25 桑原武夫『三國志のために―吉川幸次郎君に―』、『文藝』（改造社、一九四二年八月）、十三頁。『桑原武夫全集』第三卷（朝日新聞社、一九六八年）所収。
- 26 立間祥介『三國志』、『三國志演義』と吉川『三國志』（一）（吉川英治『三國志』（六）（吉川英治歴史時代文庫三八、講談社、一九八九年）、四九〇―四九一頁、雑喉『三國志と日本人』、一三六―一五四頁）。
- 27 中田耕治『三國志』と二人の作家 吉川英治と柴田鍊三郎の作品を比べて、『週刊読書人』一九六六年三月三日、尾崎秀樹『三國志を書いた理由は』、『図書新聞』一九六六年八月十三日、木村一信「日本における諸葛孔明像（二）―明治以後」、『加地伸行』『諸葛孔明の世界』（新人物往來社、一九八三年）、一七九頁、井波律子「日本人と諸葛亮」、『月刊しにか』（大修館書店、一九九四年四月号）、六六頁、雑喉『三國志と日本人』、一四四―一四八頁、吉川英治記念館編『吉川英治人と文學』（講談社、二〇〇六年）、四十一―四三頁、邱吟・吳芳齡『三國演義在日本』（宁夏人民出版社、二〇〇六年）、一六二―一七一、一八一―一九〇頁。
- 28 句読点は、徳田武編・解説「李卓吾先生批評三國志」第一―六卷（対訳中国歴史小説選集四、ゆまに書房、一九八四年）を参照した。
- 29 博文館編輯局編『通俗三國志』（四）、二八七―二八八頁。

30 吉川版、一九四二年十一月十八日夕刊。

31 野村版、二四六頁。

32 一方、書き改め合理化している場面もある。「三國志演義」では、

長坂坡で阿斗を救った趙雲は、穴に落ちてしまいが、赤い光と

共に穴の外に逃れる。野村版の底本である『通俗三國志』では、

「忽然として坑のうちより紅の光たなびき、紫の霧おこつて、趙

雲が乗つたる馬一飛に駆出ければ、張郃大に駭き、重て追ざり

けり。これ懐に抱ける小兒が、後に天子となるべきの洪福ある

によつてなり（博文館編輯局編『通俗三國志』（三）、六三頁）。」

と描かれるが、野村版では「あはや豪勇趙雲も討たれたかと思

えたが——刹那、身をそばめて突出す槍の柄をぐつとつかみ、

しまつたと相手が手許にたぐるに乗じて、ぱつと馬もともなく

土穴から躍りでた（野村版、一三九頁）。」と神秘の力ではなく、

33 穴から自力で脱出したと合理化している。

34 村上版、二巻、四〇九頁。

黄巾の乱の説明の「〔…〕それ（引用者注・南華老仙）を虚無の

彼方から引合ひに出して来たのは、流石に秀才らしい思付きで

ある（村上版、一巻、二頁）。」や連環の計での「〔…〕彼女（引

用者注・貂蟬）の一曲に國に仇する亂臣を斬らんとするの刃が

隠されてゐようとは、誰が料り知り得たろう？（同七三頁）」な

35 ど、語り手が声を覗かせる場面もある。

36 岡本版、三五二―三五三頁。

魯迅「中国小説の歴史的变化」（魯迅全集 第九集、人民文学出

37 版社、二〇〇五年）、三三三頁。

〇〇五年）、一三五頁。また、村上版は戦後の書き換えの際、「あ  
まりにも偽善的なしらじらしい劉備のせりふに嫌気がさし、一、  
二句はぶいた部分もある（村上知行『三國志』（二）（角川書店、  
一九七二年）、四〇〇頁）。」と書いている。

38 「彼（引用者注・曹操）が天性の残忍を物語つて餘りあるもの  
でせう（弓館版、一〇二頁）。」持つたが病の驕慢癖は、直ぐ又  
鎌首をもたげて来る（同一九五頁）。」など。

39 「關羽に對する歡待——といふよりも御機嫌取りは〔…〕（同上  
書、一二五頁）」「處が文官などといふものには、兎角おべんち  
やらが多いと見えて〔…〕曹操は内心大喜びの癖に、表面にそ  
れを押し隠して謙虚振りを見せる（同二四―二五頁）。」など。

40 「〔…〕恐縮顔でその繩を解いてやる處などは、人を喰つたもの  
（同上書、七四頁）。」「豪傑笑ひ一番、自分で繩を解いてやるや  
ら、上座に請ずるやら。張遼も感激して潔く歸順を誓ひました  
が、曹操のは多分例の手だったのでせう（同一二二頁）。」など。

41 「この報に接した曹操は、バリバリ歯軋りして怒りました（同  
上書、六七頁）。」もう半分は自棄糞です（同二八四頁）。」など。

42 「この點、曹操もなかなか宜しい、氣に入った（同上書、二二  
六頁）。」主君を賣る貪慾者として、斬罪に處したのは、この邊  
曹操もなかなか話せる男です（同二六八頁）。」しかし曹操は、  
一敗地に塗れたまま、決して凹むやうな男子ぢやない（同二八  
一頁）。」など。

43 同上書、三〇一頁。

44 岡本版、六四頁。

45 「だが、それきりでペシヤンコになつてしまふ曹操ではない

〔同上書、一三八―一三九頁。〕

同上書、一八二頁。その後、関所手形を関羽に渡さなかったことについては「あれ程まで別離わかれを惜しみ、心盡しの饒別を與へたりした曹操が、通行に最も必要な手形を與へなかつたのは、果して心あつてのことであらうか、匆忙の間のことゝて、うっかり忘れてゐたからであらうか。」と判断を保留している（同一八八頁）。

雄山閣版でも、「然し流石は曹操である、「これこそ眞の忠臣だ」と敢て咎めようとしなかつた（雄山閣版、七六頁）。」と、この場面における曹操の態度を評価している。

47 「〔…〕臥龍臥龍でまるで臥龍病患者みたいな劉備〔…〕（弓削版、一五三頁）」、「〔…〕寛仁大度癖の劉備〔…〕（同上書、二四八頁）」など。

48 「〔…〕スマアして随徳寺を極め込んだのは、どうも人がいいとは申されません（同上書、一三二頁）。」〔…〕劉備のベテンに遇つたのを知り〔…〕（同一三三頁）」など。  
同上書、一六七頁。

50 49 長坂坡で趙雲に救われた阿斗を投げる場面では「若干狂言らしくもあるが、生真面目な劉備としては、或は本氣だつたのかも知れませんか（同上書、一六五頁）。」と留保をつけている。

51 「〔引用者注…劉表から荊州を譲られても断つたことに対し〕玄德といふのも妙な男で、変な所に義理立てしたものだ。〔…〕さうかと云つて天下に覇をとなへようといふ野心は持つてゐるのだ（岡本版、二四二頁）。」など。

52 「〔…〕玄德の得意や思ふべしである（同上書、三四一頁）。」

53

〔玄德は相變らずの面目論で〔…〕（同三八七頁）」など。  
同上書、三三三頁。